Library

第 29 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成 10 年 10 月 26 日

CONTENTS

10年目の繊維学部分館	繊維学情報係	峯村　武	(2)
私的本事情	応用生物科学科	渡辺義人	(4)
繊維学部と私	感性工学科	仁科　惇	(6)
【納涼クイズ】	機能機械学科	中沢　賢	(8)
「上田周辺観光ガイド」⑤	精密素材工学科	村上　泰	(10)
分館通信　告知板			(13)
分館日誌			(14)
編集後記			(14)

Library（電子版）はｲﾝﾀｰﾈｯﾄでも提供しています。
URLは http://shinlif1.shinshu-u.ac.jp/online.html です。

１０年目の繊維学部分館

繊維学情報係長　峯村　武

１０年ぶりにまた繊維学部にお世話になることになって、早半年が過ぎた。先生方の顔触れも大部変わり、感性工学科の新しい建物が眩しいが、講堂や旧千曲会館、松やヒマラヤ杉など緑の多いキャンパスの佇まいは昔のままである。

繊維学部分館はこの十年の間に、建物はそのままだけれど、電子機器は増え、スタッフも次々と入れ替わり、今は若い女性ばかりになった。蔵書もおよそ２万冊増えた代わりに、昔はあった広々とした開架スペースやゆったり寛げるブラウジングの空間が増設の書架に占領されてしまっている。ここ十年の電子機器の普及と情報量の増加は急激で、情報に追いかけられるような社会のめまぐるしい変化はこの図書館にも象徴的に現れているのかもしれない。

前任のＫ係長の下に、図書館内はきめ細かな案内がなされ、内壁の剥離状態は相変わらずだが、やや狭い玄関ロビーは赤い絨毯が他の分館にない落着いた雰囲気を出している。

２階の製本雑誌は、別の保管場所を考えない限り、近い将来空いている場所（床）に平積みするしかない所まで来ている。

学部として必要な雑誌を学部の共通経費で購入し、図書館に集中配架するという方法は、予算の効率的運用上、また利用上、図書館の機能上、繊維学部の叡智を集めて、伝統的にとってきた優れた方式であると思う。しかし、近年の外国雑誌価格は掲載論文数（情報量）の増大による原価の値上りと日本経済の停滞、世界経済の動き（為替レート：対＄円安）の中で購入価格が異常に跳ね上がって、購入雑誌を継続維持することが極めて厳しい情況になってきている。この傾向は勿論全国的で、維持不可能・購入中止　－　販売部数減　－　原価上昇　－購入中止の悪循環である。これはもう根本的に、一学部一大学の問題ではなく、国家的規模で、人と予算をつけた外国雑誌収集提供ｾﾝﾀｰのようなものを創らない限りこれからの対応は難しい。（現在の分野別外国雑誌センターの機能は、これと少し異なる）

現在実施されている国立大学図書館間の相互貸借業務も、基本的には相互補完的な精神（紳士協定）に基づいて行われているもので、give and take が原則である。　従って、他大学への依頼文献数と自館での受付文献数が同じ位が理想的なのだが、先に書いた雑誌価格の高騰で購入中止となると、他大学の図書館に大きく依存せざるをえなくなる。（因みに当分館：依頼 3,230 件、受付 1,806 件、H９年度）この辺のバランスが崩れると、図書館員は、自館のユーザーよりも、他大学の図書館ユーザーのために仕事をする（あるいはその逆）という、おかしな事態になる訳で、定削によるスタッフの処理能力の問題も含めて国家的な対策が必要な所以である。

電子ジャーナルが増える中では、ユーザーが直接データベースにアクセスして、受益者負担決裁方式で文献を取り寄せる方法も今後併行して検討されることになるだろうか。

一方、学生の利用状況については、学生数も大幅に増えているが、かなりの学生が図書館に足を運んで、少ない蔵書を良く利用していると思われる。しかし、少ない学生用図書を補完するには、生協の書棚も極めて貧弱であり、周辺に大型書店もなく、公共図書館も遠いことから、他学部に比べて学生には環境的にかなり不利な状況にある。

大学図書館は、研究・教育の支援サービスを基本的機能とすると位置づけられているが、繊維学部分館としても、研究教育の両面にわたって（特に学部学生に対する）、図書館の位置づけや機能をもう少し明確に具体的に示され、実行されなければならないと感じる。

景気の低迷と国家財政の悪化で、公務員の定削は今後益々厳しくなり、信州大学も事務の一元化による省力と合理化が進められつつある中で、全学の図書館体制もその観点から現在見直されつつある。

図書館の仕事は本質的にサービス業であることからすれば、常に図書館は、そのサービスの対象者である、ユーザーとしての教官や学生と共にあるべきである。

分館のユーザーや資料（図書・雑誌）は、分野毎の特色を持った固有なものであり、建物や設備と共に隔地にある限り、直に図書館員がユーザーとのコミュニケーションをとりながら業務を行なうことが最善のサービスであることは間違いないであろう。

また、繊維学部分館としては中央館への一元化だけでなく工学部や長野地区、自然科学系学部などとの資料の分担収集やサービスの協力、提携なども合理化あるいはサービス向上策の選択肢として今後検討されてしかるべきと考える。全学保存図書館の設置あるいは中央館に全学的保存図書館機能を持たせるといったことも、合理化の一方策であろう。

「信大図書館の将来像」でも書かれているように「良く連絡調整された地域分散型図書館」が理想である。

繊維学部分館が真に学部の共有施設として、先生方や学生達の研究教育支援機関として充分力を発揮出来るよう、今後とも教職員の皆様の一層のご支援ご協力をお願いしたい。

私的本事情

応用生物科学科　渡辺義人

私は本が好きである。本が好きであることと、読書家であることとは必ずしもパラレルではない。厳密に数えたことはないが、本棚一段のおよその平均収納冊数と段数から類推すると所有している本はおよそ5000冊程になる。文庫本やムック類も含めての数である。このうち専門書の類約500冊が研究室の書棚に収まっている。聞くところによると、大学の研究室には私物の本は有ってはならないとのこと、ここだけの話である。一般に大学教官個人の蔵書数がどの程度のものか知る由もないが、専用の書庫を備え、何万冊、何十万冊を誇る蔵書家を前にしては、5000冊程度の蔵書は何程でもない。

この原稿を依頼されてから、自分はいったいこれまでどのぐらい本を読んできたのか気になりだした。読み終えた本には最後のページにその日の年月日と了の字を書くことにしているのでおよそ見当がつく。その数2割弱、つまり1000冊に届かないのである。仮に通読した冊数を1000冊とし、読書歴を古本屋通いを始めた高校時代からの50年とすると、月に平均1．7冊程度の読書量となる。とても読書家と言えない所以である。単行本も小説類は全体として数は少ないが、通読する確率は極めて高い。

しからば、あとの8割方の本はどうなっているだろうか。7割はいわゆる拾い読み（飛ばし読みとも言う）である。興味のあるところ、関心のあるところ、必要なところなどを虫食い的に読んだり、ある章だけを集中して読む場合である。図や写真の説明だけを読む場合もこれに入る。また、読書の途中で放り出したり、途中まで読んで、後で読むつもりで忘れてそのままになったものもある。途中で放り出すものには内容より文章作法が性に合わないものが多い。残りの1割は、本屋で買ってこの方、1度もページを開いたことのない本、開いても実質読むという作業をしていない本である。これらを未開本と呼ぶことにする。この手の本で最も多いのは、全集や講座、シリーズとして買い求めた本である。例えば専門書では岩波の現代科学講座や地球科学講座、共立出版の生態学講座などがある。生態学講座は全部で36巻あるが実際目を通したのは10冊前後であり、あとは未開本である。一般書では、日本史、世界史のシリーズものや種々の文学全集である。これらの半分以上は未開本になっている。漱石全集などは新書判とA5定型判の二通りあり、実際、手にして読んだのはもっぱら新書判や別途求めた文庫判であり、A5判の方は25冊、買ったままの姿で書棚1段を堂々と占領している。それに次いで多いのは新書判の本である。これにはわけがある。岩波新書の表紙がリニユアールした時（1977年5月、それまでの青表紙から黄表紙に変わる。余談だが岩波新書発行当時は赤表紙、現在はカバー付きで表はやはり赤に

戻っている。ただし、裏は白である）を機会に毎月発行される4冊前後の新書を内容を問わずすべて買っていたことがある。これという理由はない。本好きの遊び心からである。しかし2年程で止めた。専用の書棚が確実に埋められていくのに脅威を感じたからである。新書判に未開本が多いのはこの時の仕儀が尾をひいていると思われる。そのほかの本はいずれ読んで見たいと思って求めたもので、その出番を待っているものである。

この5000冊中にはいわゆる豪華本や初版本の類は皆無に近い。一般に画集、写真集は値が張るが、現在有る本のなかでは、中村直人の画集、4万8千円が最高額のものである。このほかに画集、写真集は200冊程あるが、高いものでも2万円前後である。専門書では25年前に手に入れた吉村信吉著「湖沼学」（三省堂）の2万円が最も高い。この本は昭和12年に発行され、その後絶版になったもので、湖沼学に関する古典の一つとしてこの分野の研究者にはつとに知られているものである。旅先の東京本郷界隈で古本屋をはしごしている時に見つけたもので、先のこともあり全額払えず、残額を送金して本を送ってもらったことを覚えている。いずれにしても愛書家にはほど遠い。

先ほど、5000冊程度の蔵書は何程でもないと書いたが、これらの本が10畳足らずの書斎に居候するとなると穏やかではない。これに雑誌や種々の資料が加わる。すでに、あふれた本が出店のごとく、他の部屋に進出し、家人の眉間のしわを増やしている。「部屋が狭くなる」、「床が下がる」、「地震の時危険だ」などなどが理由である。このほかに、こっそりといくつかのダンボール箱に入れて、押し入れにしまい込んである本もある。要するに本を売ったり捨てたりすることが出来ないのである。来年3月に退職する身とあらば、それまでに研究室の500冊も収納しなければならない。我が書斎も本格的な本のリストラの時期を迎えたようである。

繊維学部と私

感性工学科　仁科　惇

感性工学科が発足して今年で4年目になる。発足時の入学生が4年生となって、学科としてようやく全学生が充足したわけである。そして私もまた繊維学部4年生となり、しかも来年3月には彼らと共に卒業ということになる。とはいえ、わたしはただ4年間在籍していたというだけであって、とてもまともに卒業する資格はない。学生になぞらえば、共通教育関係の単位はなんとか取得したが、肝心の専門科目が殆どノータッチなのだから、卒業どころではない。学習意欲喪失による退学か、授業料未納による除籍というところである。以下、弁解がましいけれど、退学者の心境の一端を記すことにしたい。

それにしてもなんという運命の巡り合わせか、昭和44年以来勤めた教養部の解体は、皮肉にも我が家の解体喪失と全く重なってやってきた。平成5年の夏、最愛の妻に上向結腸癌が発見され、同時に他臓器への転移も認められて、発見は即、死の宣告でもあった。8月の手術直前、今度は高齢の父が脳梗塞で倒れ、東京に嫁いだ一人娘は7月に出産したばかりで、私は文字通り右往左往、東奔西走の毎日だった。大学改革は大詰めを迎え、当時評議委員だった私は即辞任を申し出たが、翌3月の任期切れまでは許されなかった。繊維学部でも新学科設立の動きが活発化していた。1年9ヶ月の闘病の末、妻が亡くなり、翌年12月に父が逝った。さらに次の年、つまり昨年6月には私が面倒をみていた義弟が、若年性アルツハイマーで亡くなった。妻と二人姉弟だった義弟は、一時期姉弟で信大病院に入院して世話になった。以後は諸施設を転々とした。

というわけで、私は感性工学科に移行して以来3年連続で葬儀を始めとする多様な私事にかまけ、その間自分自身の胃潰瘍の治療と全身のオーバーホールの必要で、病院通いを余儀なくされた。こういった状態はもう社会的な活動のできる態勢とはいえない。私はもっと早く退学すべきだったのかもしれない。ただ、必要最低限の義務、講義関係の業務だけは休むことなく努めた。実のところ、それが私の支えであり救いだったのだと思う。そしてそういう私を理解し、許してくれた周囲の方々に、私は感謝するほかはない。

その点、私が繊維学部を選んだことは間違っていなかった。（もっとも教養部解体に関しては私は今でも疑問に思っている。行革の一環だったにせよ、信大の場合徹底したカリキュラム改革でよかったのだと思う。）私が自分の研究環境という点に固執するならば、当然人文、教育系の学部に所属すべきであった。だが、当時の教養部には、役職にある者や比較的高齢の者は隔地学部に転属しよう、という暗黙の了解があったように思う。それに、正直なところ疲れ果てていた私には、研究環境より温かい人間関係がなによりも貴重に思われていた。個人的なことは

さておき、私は繊維学部に誠実さと新学科創設への熱意を感じた。

繊維学部にはやはり独自な伝統が生きていたのであろう。独立不羈の心意気と良識である。昭和24年新制大学誕生の折、繊維学部は単科大学としての発足を企画したが、結局は一県一国立大の方針に従って信州大学の一学部となった。しかしその際自前の教養教育の枠を獲得した。その後昭和41年、教養統合による教養部誕生の折には学部内でも賛否伯仲、結局は大学存立のため統合に参加した。しかもその時もっとも多くの教官を拠出した学部が繊維学部であった（17名、うち3名は基礎教育のため還元）。その後の教養部において、繊維出身の2人の教官が部長としてリーダーシップを発揮し、それも長期にわたって教養精神を培った。

私の中の繊維学部神話は、どこかでこの教養精神という夢と結びついている。それはまず自己のアイデンティティを確立し、平たくいえば常に現実に即して自分に正直に生き、しかも大局的に見る眼を失わず、そして行為するということである。そういう理念からすると、私の感性工学科での4年間は、やはり単位不足による退学か除籍以外の評価は与えられない。一刻も早く身を引いて、希望と魅力に満ちた感性工学という新分野に、新風を送り込まなければならない。超克すべき難問がハナから見えているが、そしてこれ亦抽象的な言い方であるが、感性工学は「大いなる自然の生命」に学ぶ姿勢を忘れてはならないと思う。私が関心を寄せる芸術の世界は、目に見える世界と見えない世界、此岸と彼岸を結ぶものとしてある。それは必ずしも見た眼の綺麗さや快適さのみの世界ではない。芸術を含め、文化とは同様に、制度や組織がどんなに変革されても、それを生かすも殺すもそこに関わる人間次第であり、計量不能の品位というのだから、気の長い話である。

常田キャンパスには空間的な余裕があっていい。とりわけひっそりと佇む古い講堂には品格がある。新しいもの総てがいいとは限らない。むしろ古くから生き続けているものにこそいいものが多い。背後に人間の息吹を感ずるのである。そういう意味で、伝統ある良識の府、繊維学部と別れるのは寂しい。

納涼

最近の木造建築物は製材した棒や板を金属のボルトナットで締結したり，接着したりして組み立てますが，本来の日本の建築物は木を削り穿って，ほとんど釘など金物は使わずに組み上げました．木造の塔などはその典型といえるでしょう．国宝のシンボルマークは確かオーバーハングしながら上部構造を支える肘木の形であったと思います．狭い上田盆地には，国宝，重文の塔が4基あります．塔の数では奈良にかないませんが，塔の密度？では日本一です．えエ！まだ見てない．それはいけません．ぜひ，たおやかな美しいたたずまいを見に出かけましょう．幸田露伴の「五重塔」には，こうした建物を匠が己の命を賭けてつくる様がリアルに描かれています．

さて，前置きが長くなりましたが．木組みのクイズを2つ出します．暑さを忘れるよう考えて見ましょう．

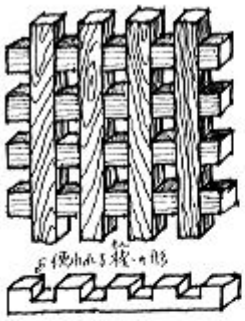

図1 帯通の格子

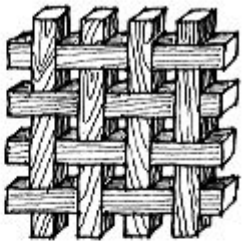

図2 千鳥格子

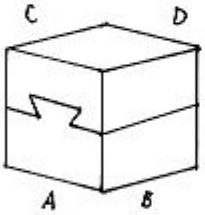

図3 帯通のつなぎ

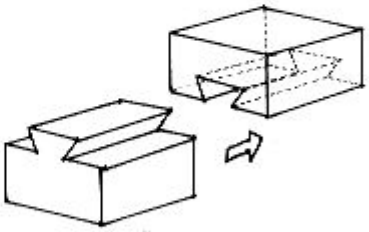

図4

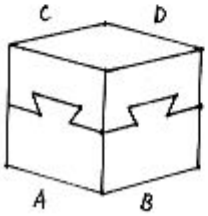

図5 四面が入り組むつなぎ

ショーケースの展示（図書館入口）は、正解の作品で、津田作次氏の作品です。

クイズ

１．木造建築の建具のあちこちに図１のような格子の組み物を見かけます．これは図示の桟（さん）をつくれば容易に組み上げられることはお分かりでしょう．図2は「千鳥格子」と呼ばれる組み物です．縦横の桟が交互に表裏に出る不思議な格子です．布では「平織り」に相当します．金網では餅焼きの網にこんなのがありました．糸や針金は自由に曲げられますから，図2のように１本の線が交互に表裏に出るように組むのは簡単です．ところが木材は曲げられません．

“千鳥格子は桟をどういう形に削りどう組み合わせればできるのでしょうか”

これが問題です．

高山のある祠の正面の格子戸がこの千鳥格子です．さすが匠の里ですね．夏休みに飛騨の高山へ出かける人はついでに調べてきましょう．

２．図３は梁と梁をつなげるようなときに使われた組み方です．それぞれは図４の様な形になっており組立分解ができます．この場合Ａ，Ｄ面には図のような同じ入り組んだ接触線が見られます．Ｂ，Ｃ面は同じ直線の接触線が見られます．それでは，

“図５のように，Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ各面に入り組んだ接触線が現れる粗子はできるのでしょうか．できるとすれば，２個の木片はどのような形につくればよいので

これが問題です．ただし，木片は2個で，ちやんとこわさずゆがめず組み立て分解ができなければいけません．

念のためお断りしておきますが，図5の組み方は昔の日本建築で使われたというものではありません．

（出題：機能機械学科中沢賢）

＊＊＊

このクイズは8月に出題されたものです。（※答えの募集は９月いっぱいで締め切りました）

正解は、次号の Library（１月号）に掲載致しますので、じっくりゆっくりお考え下さい。

連載⑤

上田周辺観光ガイド

村上　泰

◎　近郊のおすすめスポット

⑭布引観音（小諸）

小諸駅の西4キロ、集塊岩の大絶壁が千曲川のほとりにそびえ、その中腹に釈尊寺があります。この寺は「牛に引かれて善光寺」の布引伝説で名高い寺です。大岩の裂け目のような谷あいの中の急な参道を登ってゆくと、途中、牛岩や善光寺洞などという所もあります。しばらく登って見上げると、頭上にせまる崖の中腹に観音堂がみえてきます。さらに登ると本堂を経由して観音堂まで到達します。観音堂を通り抜けて、岩肌を 30 メートルぐらい登ると、展望台があり、眼下に千曲川、向かいに浅間山が見えます。帰り道は布引山頂を経由して、本堂まで降りるようになっています。

布引観音周辺には温泉が多いので、帰りに温泉に寄ることをお勧めします。一つは参道入口の駐車場を北御牧村の方へ向かうと【御牧乃湯】があります。ここは入浴料が安く、露天風呂もあります。もう一つは【国民年金健康保養センターこもろ】です。日本庭園風の露天風呂に入浴できます。もう少し離れていますが、北御牧村の【アートヴィレッジ明神館】にも景色のよい露天風呂がありますし、浅科村の【穂の香乃湯】も大きな露天風呂がありお勧めです。マンズワインの小諸ワイナリーに立ち寄ることもできます。

⑮湯楽里館（東部町）

湯楽里館は上田の隣町である東部町が烏帽子岳の裾野に広がる見晴らしのいい丘につくった温泉です。弱アルカリ性単純泉で露天風呂やサウナもあります。「東部町地麦酒倶楽部・オラホビール」が併設されており、地ビールを醸造しています。レストランで地ビールと地元の素材にこだわった本格料理を、窓一杯に広がる信州の風景とともに楽しめます。

⑯王ヶ鼻（美ヶ原）

車で松本へ抜けたいが、どこかへよって行きたいという方のためにお勧めなのが美ヶ原です。美ヶ原というと【美ヶ原高原美術館】を思い浮かべる方が多いでしょうが、一番にお勧めしたいのは【王ヶ鼻】です。北アルプスが大変きれいに見えるところです。上田からは丸子町を経由して武石村へ向かいます。途中、【和紙の里】や【ともしび博物館】に立ち寄るのもよいでしょう。美ヶ原へ向かって武石村を横断して行くと、美ヶ原高原美術館へ行く道との分岐点に来ます。ここを左折せずに直進するのがポイントです。番所ヶ原スキー場を過ぎると細い道になりますので、すれ違いに自信のない場合は危険です。最終的に松本の方からの美ヶ原林道と合流しますので、左へまがって美ヶ原牧場を経由して終点の駐車場まで車を走らせます。ここに車をとめて、鉄塔の立っている王ヶ頭ではなく王ヶ鼻を目指して林道をのぼります。王ヶ鼻は松本市内の方へ突き出したようなところで、崖の上に石仏群が立ち並んでいます。帰りは有料道路である美ヶ原林道を下れば、松本へ着きます。

⑰善光寺・東山魁夷美術館（長野）

長野といえば善光寺。善光寺へ参拝したら、となりの城山公園にある【東山魁夷美術館】もぜひご覧下さい。

⑱小布施

小布施は栗菓子と北斎の町です。洗練された観光地ですので、1度は足を伸ばすことをお勧めします。小布施でもっともお勧めなのは【岩松院】です。葛飾北斎の天井絵「鳳凰図」があります。小布施の中心には北斎館もありますので見学するといいでしょう。なお上田から小布施へは菅平を越えて須坂を経由するのが近道です。小布施・須坂にはたくさんの美術館があります。

⑲米子大瀑布

上田から見ると菅平の裏側にある大きな滝が米子大瀑布です。菅平を越えて須坂側から長い舗装されていない林道を登ると米子大瀑布入口に到達します。時間があれば小布施へ行くついでに見学するのがよいでしょう。

次回の連載は、凍みる信州の冬を越すために欠かせない温泉の特集です。
村上先生オススメの日帰り温泉をご紹介します。

♪♪♪分館通信♪♪♪

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています

次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ（http://shinlif1.shinshu-u.ca.jp）でご案内していますので、そちらをご覧ください。

⇒ *1997 年 学術雑誌の製本について*

前号でもお伝えしましたが、7 月より 1997 年学術雑誌の製本作業を行っています。外注に出しますので製本中の雑誌は図書館にはありません。必要な論文がある場合には、「文献複写」をお申込み下さい。

製本雑誌リストや搬出日・納入予定日は、図書館入口の掲示板や繊維学部分館ホームページでお知らせしていますので、そちらをご覧ください。

作業期間中、ご迷惑をおかけいたしますが、ご協力下さいますようお願いいたします。

	搬　出　日	納入予定日
第 2 回製本	9 月 2 日（水）	10 月 22 日（木）
第 3 回製本	10 月 22 日（木）	12 月中旬

※ 納入日は多少前後することがあります。

⇒ *冬季休業中の特別貸出について*

冬季休業に伴い、下記の通り貸出期間を延長します。

貸出開始日	大　学　院　生	平成 10 年 11 月 24 日（火）	10 冊以内
	学　部　4　年　生		8 冊以内
	学部２・３年生	平成 10 年 12 月　9 日（水）	3 冊以内
	研究生・聴講生		
返却期限日	**平成 11 年1月 6 日（水）**		

※ 返却期限日は厳守してください。

⇒ *夜間開館の休止と休館日について*

12 月 24 日(木)～1 月 5 日(火)の冬季休業中は、開館時間が短縮されます。

短縮開館	12/24(木)25(金)28(月)・1/4(月)5(火)
休 館 日	12 月 29 日(火)～1 月 3 日(日)

※ 図書館業務は通常通り行います。

開館日カレンダー

October 1998

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

November 1998

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

December 1998

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

January 1999

Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

10	[通　　常]	8：30～20：00
10	[短縮開館日]	8：30～17：00
10	[休　館　日]	終　日　閉　館

分館日誌

（8月～10 月）

7/22～24	目録システム地域講習会	出席者－斎藤
7/23	第2回附属図書館運営委員会	出席者－小西運営委員
7/30～31	ILL システム地域講習会	出席者－武田・中村
8/7	第4回図書委員会	
8/20	第3回附属図書館運営委員会	出席者－中沢分館長・小西運営委員
8/20	第1回附属図書館事務改善実施委員会	出席者－峯村
9/24・10/1・8	信州大学パソコン研修（第1～3回）	出席者－武田
9/28	第2回附属図書館事務改善実施委員会	出席者－峯村
10/27～29	信州大学会計事務職員実務研修	出席者－大槻
10/28～30	信州大学実用英会話研修	出席者－武田

編集後記

スポーツの秋、食欲の秋、おしゃれの秋。

秋にはやらねばならない気にさせる表現が数多くありますが、気が付けばもう冬も間近。信州の秋は大袈裟なくらい短いので「何もせずに終わってしまった」という方も多いのではないでしょうか。今回の Library は、連載を含め情報満載5本立て。これさえ読めば読書の秋を満喫！…した気分を味わえるかもしれませんよ。

次号は来年1月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。